

日本ラカン協会第 22 回大会シンポジウム

「クィア精神分析」の可能性：精神分析とジュディス・バトラー

日時：2022 年 12 月 4 日（日） 15 時～18 時

場所：オンライン

【企画趣旨】

性の多様性に対して精神分析が取る態度は、歴史的に大きく揺れ動いてきた。同性愛を病気ではなく「性的機能の一つのヴァリエーション」と見て、これに対して開明的な態度を取り続けたフロイトだったが、彼の後継者の間ではこれを専ら病理的なものとみる見方が広がった。こうした見方を脱け出そうとする動きはまずアメリカで明確になる。1960 年代の精神医療分野での価値観の大きな変化やゲイ解放運動を承け、1970 年代初めにはアメリカ精神分析協会（APA）で精神障害のリストから同性愛がほぼ外され、1990 年代初めには同じく APA で、分析家候補生から同性愛者が暗黙のうちに除外されてきた状況に抗して反差別ポリシーが採択されることになった。

同性愛者であるような分析主体と分析家を差別から解放しようとするこうした動向は、1990 年代後半から国際精神分析協会（IPA）を舞台としてグローバルな広がりを見せるようになり、これはフランスにも影響を及ぼさなかった。APA と同様の反差別ポリシーが激しく議論された時期に IPA の大会開催国となったフランスでは、このポリシーが最終的に採択される 2002 年前後の時期から、分析家による包摂的な立場の発言が目立つようになる。とはいえ精神分析と同性愛の「深く、隠れた、複雑な関係」（R.Roughton）が、こうした制度的な改革にもかかわらず残り続けていたことは、2013 年のフランスにおける同性婚の法制化をめぐる議論のなかで、分析家が賛否両方の立場から発言したことにも見て取ることができるだろう。

さてこうした流れの中で、フランスでは 2010 年代の後半になると精神分析と性の多様性の関係をあらためて問い直す動きが生じてきた。この問題をフロイトに遡って問い直すとするもの、精神分析の内部から批判的な立場を一層先鋭化させるものなど、さまざまな角度から行われてきたこの問い直しだが、なかでもラカン派の精神分析家ファブリス・ブルレーズ氏の 2018 年に公刊された著書『クィア精神分析：マイナー臨床とジェンダーの脱構築』は、原理的な対立の構図に置かれることの多い精神分析とクィアの間、同性愛者にして精神分析家という著者自身の立場から積極的な関係を打ち立てようとするものとして注目され、すでにスペイン語とイタリア語で翻訳が出版されている。本シンポジウムでは著者のブルレーズ氏に、ドゥルーズ/ガタリとジュディス・バトラーを主要な対話相手として展開される「クィア精神分析」の構想について具体的にお話しいただいた上で、バトラーの訳者として彼女の思想を知悉されている清水知子氏にバトラーと精神分析の関係について論じていただき、2018 年の著書で始められたラカン的な精神分析とクィアの対話を 2022 年の日

本に延長することを目指す。

【提題者および提題タイトル】

・ Fabrice Bourlez (精神分析家, Ecole Supérieure d'Art et de Design de Reims)

「クィアの人々が分析的行為に触れるとき：「触覚 (tact)」を再考する (Quand les *queers* touchent à l'acte analytique: repenser le *tact*)」

・ 清水知子 (東京藝術大学)

「精神分析をクィアする—ジュディス・バトラーにおける行為遂行性・時間性・政治」

【司会】

・ 原和之 (東京大学) / 立木康介 (京都大学)

以上